深田久弥
山の文化館だより
令和８年
冬号

深田久弥　山の文化館
〒九二二－〇〇六七
石川県加賀市大聖寺番場町十八
TEL（〇七六二）七二－三三－一三
FAX（〇七六二）七二－一一八一

♪山の歌♪

エーデルワイスの歌、雪山賛歌、シーハイルの歌、いつかある日、谷川小唄、新人哀歌、放浪の歌、遠き山に日は落ちて、民謡では安曇節や白山カンコ踊り、・・・数えだしたらキリがない。以前は、テントの中で、雪洞の中でよく歌っていたものである。

山で歌が歌われなくなったのを危惧している人達の中で、日本山岳文化学会の石丸一夫氏は行動を起こした。山岳部や山岳会で作っていた『山の歌集』の散逸を防ぎたいと、周りに声掛けをし、賛同してくれ人たちから、数多くの山の歌に関する資料が寄せられた。それは『山の歌』と題する資料集となり、そのリストは二十九頁にもわたる膨大なものになった。この研究の成果は、「山の文学と芸術」と題するシンポジュームで発表された。

他にも、山で歌うのを絶やしたくないと思う人達がいた。黒川勝氏や小谷田佳一氏をはじめとする、静岡県高体連登山部の方たちである。「生徒たちと山で歌を歌いたい」という熱い思いから『うたごえ』と題する歌集を作った。それは、『うたごえ５０』、『うたごえ８０』、『うたごえ１００』と発展し、三度も作られた。そして、高校山岳部の生徒たちに「山の歌」を歌ってもらう活動を続けてきた。黒川氏は現在も活動を続けている。

登山サークルのホームページに、山の歌のリストを掲載して、山の歌を歌い継ごうと呼び掛けているのもあった。深田久弥山の文化館でも、ささやかながら活動していた。山の文化館のスタッフを中心に小人数ながら、キャンプファイヤーを囲んで歌っていた。

山の歌は、人から人へ口伝えで広まってゆく様であり、そこで替歌も作られてゆく。あの「坊がつる賛歌」も替歌である。昭和二十七年（１９５２）ごろに坊がつるにある山小屋で九州大学の学生達によって作られ、山の仲間の間で歌い継がれていた。国体に参加した石川県チームのメンバーも教わっていた。坊がつる賛歌がつくられたと同じころ、石川県立小松高等学校山岳部でも、同じようなメロディーで「山男の歌」が歌われていた。山岳部の歌集の中に載っている。どれも元歌は「広島高等師範学校山岳部　山男の歌」である。最近分かったことであるが、当時小松高校山岳部の顧問の先生が、広島高等師範学校の出身だったことである。広島高師直伝の替歌だったわけだ。歌詞が変えられている部分は、先生が作詞されたものであろう。

こんな話題もある。旧制第一高等学校旅行部Ｏ・Ｂ会「縦の会」発行の『一高旅行部の足あと』に書かれていた。あるＯ・Ｂの方が、金沢大学に教官として転任してくると、金沢大学ワンダーフォーゲル部で、自分たちが旅行部の現役時代に歌っていた歌が歌われていた。懐かしく、学生時代に歌った山の歌のことを思い出していた。それは「そんなにお前はなぜ嘆く・・・」で始まる「放浪の歌」であった。この歌も、あちこちの大学山岳部や山岳会で歌われていた。発信元は一高旅行部なのだろうか。

今後も皆で、山の歌を歌い継いでゆきたいものである。

広島高等師範学校山岳部
山男の歌

一、同じ山への　憧れを
胸に抱いて　行く道は
教えの道ぞ　山男
広島高師の　山男

二、人みな花に　酔うときも
残雪恋ひて　山に入り
涙をながす　山男

三、雪解の水に　春を知る
広島の山は　低くとも
夏は故郷の　山が待つ
岩をよずれば　山男

四、無我を悟は　この時ぞ
深山紅葉に　片時雨
テント濡らして　暮れてゆく
心なき身の　山男

五、ものあわれを　知る頃ぞ
町の乙女ら　想いつつ
尾根の処女雪　け立てては
シュテンボーゲン　山男

六、浩然の気は　言ひ難し
同じ教えの　道を行き
まぶたに浮かぶ　山の道
道は一つぞ　山男
広島高師の　山男
広島高師の　山男

小松高校山岳部
山男の歌

一、同じ山への　憧れを
胸に抱いて　行く道は
希望の道ぞ　山男
ああ荒涼の　酔うころも

二、人みな花に　山に入り
残雪恋いし　山男
涙をながす　春を知る
雪どけの水に　低くとも

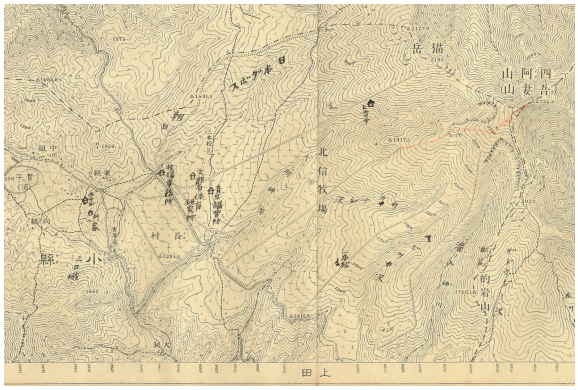
三、小松の山は　山が待つ
みれば故郷の　山男
山によずれば　この時ぞ
無我を悟は　道を行く

四、同じ理想の　山の道
まぶたに浮かぶ　山男
道は一つぞ　山男
ああ荒涼の　山男

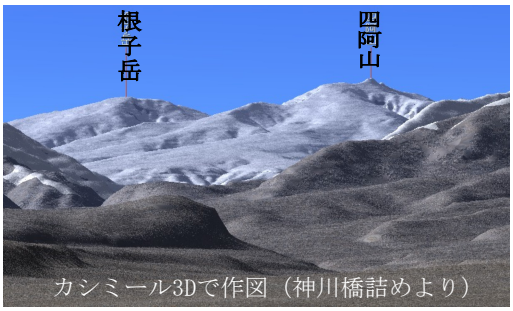
久弥と五万分の一地形図と赤鉛筆と

その31

今回は「四阿山」を取り上げてみよう。書き込みがあるのは、地勢図「長野」と長野の9番「須坂」だった。「須坂」の表には菅平と書かれている。二十万分の一「長野」には「四阿山」が赤鉛筆でくっきりと囲まれていた。五万分の一地形図「須坂」の赤鉛筆のラインは、1917・2（現在は1917・5）のピークの下部から始まり、2106の小四阿を経て四阿山の三角点まで引かれている。ほかには五つの沢の名前、牧場事務所、文部省体育研究所、ホテル、ヒュッテなどがペンで書きこまれている。



この赤鉛筆のラインに関する文章は『山があるから』の「四阿山」があった。一九六一年（昭和三十六年）3月の山行で、なんと、連れは山川勇一郎と藤島敏男であった。山川とは昭和八年二月に乗鞍で運命的な出会いをしているが、初めて出逢ったのは菅平スキー行の帰りの馬橇の上だった。その菅平スキー場へ、今度は山川の車に乗って出掛けたのである。「私たちは自宅から宿まで一歩も費やさず到着したわけである」と書いており、これまでの久弥の移動手段との変わり様に感心している。移動中、神川に架かる橋のたもとに車を止めている。「谷の奥遥かに白銀の四阿山が見えたからである。頂上がやや左に傾いだ屋根型をして、その左端に乳首のような丘が盛り上がっている。美しい気品ある形である。昔の人が神とあがめたのも無理はない。」と書いている。



カシミール3Dで作図（神川橋詰めより）

菅平の宿で二泊し、天候の回復を待ち四阿山目指して出発した。最初は大明神沢に沿って登り、沢を渡って稜線を目指した。稜線に出たあたりから赤鉛筆のラインがある。最初のピークを巻き、小四阿を経て、途中急登で苦しんだ部分もあったが、無事山頂に着いた。帰りは、久弥のスキービンディングが壊れ、応急修理したが滑りにくく、行動が遅くなり宿に着いたのは夜遅くだった。

聞こう会

会場：深田久弥山の文化館　聴山房
時間：午後一時三十分～三時

聴講無料です。お気軽にお越しください

一月十八日（日）
演題：人はなぜ山に登るの？人生の短さについて、自分の人生を生きる
講師：田中康典氏（セブンサミッター）

二月八日（日）
演題：白山と共に生きる
講師：川畠敦仁氏
（白山自然保護センター研究主幹）

三月二十二日（日）
演題：知られざる加賀の修験道
講師：細川孝春氏（三角点研究家）

読書会

会場：深田久弥山の文化館
時間：午後一時三十分～三時

一月十六日（金）
『日本百名山』より「八幡平」

二月二十日（金）
『日本百名山』より「蓼科山」

三月十三日（金）
『日本百名山』より「塩見岳」

ホームページもよろしく
https://yamanobunkakan.com
深田久弥山の文化館

山文HP